

大阪の居住文化とインテリア

京都大学大学院工学研究科教授 高田光雄

皆さんこんにちは。高田と申します。私は、住まい・まちづくりの研究を、大阪や京都などをフィールドとして続けております。今日は「大阪の居住文化とインテリア」という演題をいただいておりますので、私がこれまで大阪で関わってきたいくつかのプロジェクトをインテリアの問題を中心に紹介させていただいて、インテリア研究に携わっておられる皆さんに何かお役に立つことができればと思います。

まず、近世大阪の居住文化と裸貸についてお話しいたします。これは、昨日皆さん行って頂いた「住まいのミュージアム 大阪くらしの今昔館」(以下、今昔館)の話を中心にしたと思います。次に、それとの関係が大いにあるのですが、私自身が三十数年間取り組んでいるスケルトン・インフィル住宅の中で、特にインテリアに関連するインフィル設計の話をして頂きます。最後に、時間があれば、愛着型インフィルという、最近私が住まいづくりの観点から関心を持っている事柄について、少しだけお話をさせて頂きたいと思っております。

1. 近世大阪の居住文化と裸貸

これは(図1)、江戸時代の終わりごろの大阪(現在の大阪)の町の都心部を描いた鳥瞰図というか、木版画なんですね。この木版画は、今昔館の所蔵品でございます。九枚つづりの木版画で、もっと横に長いのですが、その中で、都心部をクローズアップしています。

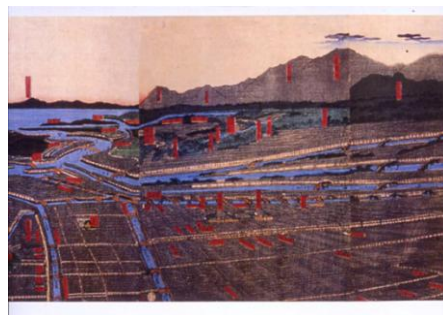


図1

よく見ると、整然とした街区が大阪の都心部には形成されていて、木造二階建ての長屋を中心としたたくさんの住宅が相当高密度に建っていたことが良く分かります。

「摂津名所図会」(図2)で、町の様子をもう少しクローズアップして見て行きましょう。都市の中では、通りと町家が一体となった空間が形成されています。屋間は通りに面した町家の格子が外されています。昨日、今昔館を見て頂いた方は、通りに面した



図2 摂津名所図会

格子が二階にサッとスライドアップするような、そういう仕掛けが組み込まれていたのをごらん頂いたかもしれません。例えばそういう仕掛けで、昼間はパブリックな道の空間とプライベートな家の中の空間が一体になる、夜になると格子を戻して、プライベートな空間とパブリックな空間が分かれる。こういう都市空間が、都心部一面に広がっていたというわけです。

これも(図3)やはり、大坂の都心部を描いた絵なのですが、矢印の部分を見て頂きたいと思います。ここに家が建っているということなのですが、これはいわゆる裏長屋で、街区の中にある借家です。しかし、表通りに面したところにもたくさんの長屋がある。つまり、借家がある。長屋建ての棟が、一続きですね。大変長い棟の表長屋なのです。当時の大坂の町には、表長屋、表借家というのがたくさんあった。この絵



図3

のように、それぞれの借家では異なるお商売をされていた。そしてよく見ると、お店の種類によって、借家でありながら家の間取りが違っていた。店先が土間であったり畳の部屋であったり、店の造りが違っていたり、そういう多様なニーズを表長屋の建築が受け止めることができていた。入居する人によって異なるニーズを受け止めることができる借家の仕組み、これは一体どうなっていたのかということでございます。

これは(図4)、昨日皆さん見て頂いた、江戸時代の大坂を復元した町の様子です。通りの両側には一戸建ての建物もあれば、長屋建ての建物もある。一戸建ての場合は、一敷地に一建物、一敷地に一つのお店があるということなのですが、長屋建ての方は、一つの建物の中に複数のお店が入っています。先ほど見て頂いた絵と同じような状態が、この道の両側に広がっています。話はそれますが、この看板(矢印)、昨日お気づきになったがどうか分かりませんが、あとでこの看板がもう一度出てまいりますので、覚えておいて頂きたいと思います。



図4

さて、復元されたこの江戸時代の町は、架空の町なのですが、色んな根拠資料をつなぎ合わせて作っており全く根拠がないわけではありません。江戸時代にはこういう町が存在していたという、そういうことが全体としては何らかの資料に基づいていえるというような町なのです。これは(図5)、ミュージアムの中にこの町をつくる前に作製された模型です。一部の家の屋根を取って上から見ると、このようになっています。例えばここは、表の三軒が長屋建てになっています。ここは、裏長屋です。薬屋さん

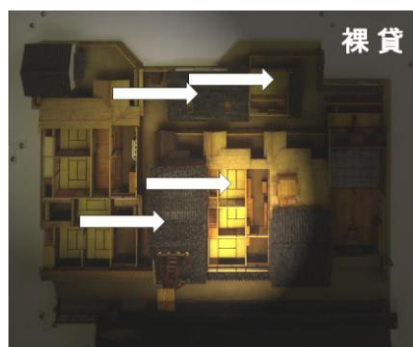


図5

がここにあったと思いますが、ここは一戸建て、独立した建物ですが、お店と居住用の空間が一体となっている建物です。ここでは、長屋建てのところに着目して頂きたいと思います。長屋建てのところは屋根、柱とか梁、それから外壁とか、要するに建物のシェルターにあたる部分、基本的な構造にあたる部分、これらは全て大家さんの所有物ということになっています。借家ですから、当然といえば当然です。しかしながら、家の内部は現在の借家とはだいぶ違います。家の中の畳や障子や襖、あるいは流しやかまどといった設備関係、場合によっては上がり框や天井板まで、要するにインテリアの構成要素は店子が調達する、こういう仕組みでできていたわけです。おそらく、この話は昨日説明があったのではないかと思います。こういう仕組みが江戸時代の終わり頃の大坂では一般的だったのです。これを裸貸しと呼んでおります。こういう仕組みが極めて広く普及していたということは世界的に見ても驚くべきことです。

さて、どうしてこういう仕組みが普及したのかということ。これには多くの説があります。基本的には、賃貸住宅経営において、大家さんと店子の間で色んなトラブルがあるのですが、こういう仕組みで両者の役割分担を決めておくとトラブルが少なく、全体としては合理性が高かったということがあられるようです。しかし、その前に、何よりも、大坂ではそれほど借家が多かったということがあると思います。

このグラフ(図6)は実は、江戸時代ではなくて、1941年、昭和16年に大都市住宅調査という厚生省生活局が行った調査です。悉皆調査、つまり全数調査ですから信頼性が高く、第二次世界大戦前の日本の大都市の住宅事情を知る貴重な資料です。グラフの4本目から下を見ていただきたいと思

うのですが、縦軸には日本の大都市の名前がずらっと並んでいます。色分けですが、赤いところが持ち家の割合を示しています。黄色いところが借家の割合、青いところは、社宅や官舎といった給与住宅の割合、これも借家の一部という風に考えると、持ち家系のものと借家系のものとの割合がこれでわかる。全国で一番借家が多いのは大阪で、9割を超えています。

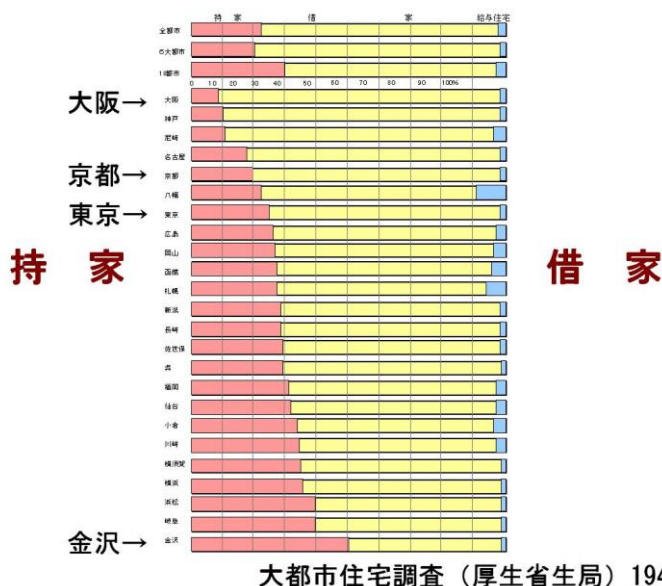


図6 大都市住宅調査

持ち家は1割以下しかありません。そして、京都は持ち家が2割、借家が8割、東京は、持ち家が25%、4分の1ですね、4分の3が借家、日本で一番持ち家率が高かったのは金沢で、持ち家5割、借家5割という状況だったわけです。平均すると、大都市では持ち家

が2割あまりあって、他は借家だったということです。この状況は、実は江戸時代の終わり頃からそんなに大きく変わっていない。大坂もやはりそういう状況でしたが、大坂は他の都市に比べて、たとえば、当時の大坂、京都、江戸を比較しても、借家の割合が特に多かった。その中で、裸貸しというシステムが成立をして、また機能していたと考えられます。

次に、技術的な視点から、この裸貸しというシステムがなぜ実現したのか考えたいと思います。いくつか背景がございます。その一つとして、モジュラーコーディネーションと申しますか、いわゆる京間の寸法体系が非常に重要です。

京間と江戸間を比較しますと(図7)、畳の寸法が京間の方が江戸間より大きいという特徴があることがよく知られています。けれども、もっと重要な特徴は、寸法そのものではなく、その寸法体系にあります。京間というのは、柱の内側から内側までの寸法が三尺一寸五分という関西の畳の短辺の寸法の倍数でできています。畳割、つまり内法制を使っているのです。これに対して、江戸間の方は、柱の中心から中心までを三尺の倍数でできている。柱割、つまり心々制を使っている。柱割りでは畳の寸法は後から決まります。この違いは裸貸しを行う上で、決定的でございます。大坂は、当然京間を採用していますが、大坂の家は内法制を使っていますから、畳の寸法が全部同じという事になります。江戸間は、同じ部屋の中でも畳の大きさが違います。大坂では畳の寸法が同じですから、同じ部屋、同じ家の畳を入れ替える事ができます。ある家の畳と隣の家の畳も入れ替える事ができます。大坂の家と、京都の家、奈良の家、滋賀の家の畳も入れ替える事ができる。引越しの時に、畳を持っていっても、基本的には次の家で使えるというのが関西の大きな特徴でございます。畳だけではありません。畳の寸法が同じという事は、障子や襖、その他、裸貸しのシステムで店子の調達することになっている住戸内の建具類、家具類、道具類は、寸法が統一されていて使い回しができるようになっていた。これは、非常に重要な裸貸しの技術的背景ですが、更に、さきほどお話した借家の多さとこの背景があるためにもう一つ重要な背景が生まれます。寸法が同じだという事は、家を建てる前に畳を作る、襖を作る、障子を作るなどという、建具などの見込み生産が可能だという事になってくるわけです。これについては、後でまたお話ししますが、こういうことが、裸貸しを支える大きな背景になってくるわけでありませぬ。

この資料(図8)ですが、江戸時代のタウンガイドのようなものを複数集めて、似たような業種の案内を切り抜いたもの

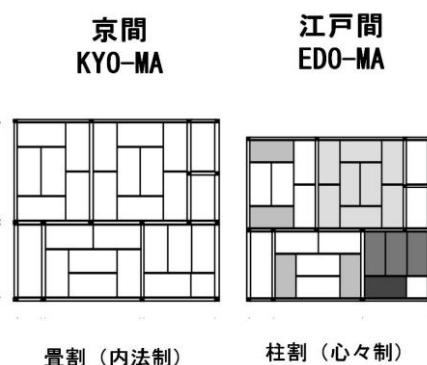


図7 京間と江戸間の畳モジュール



図8

です。萬立具所とか、新古道具売買所とか、新古建道具所とか、表現は色々ありますが、要するに、新しい建具や道具と古い建具や道具を売ったり買ったりしている、そういうお商売を指しています。

先ほど覚えておいて下さいといった看板がここにあります(図9)、これ実は、この資料をもとにして復元された看板なのですね。ここに三日月のマークが入っています。これが建具や道具を売買するお店の看板なのですね。町のあちこちにこういうお店が結構たくさんあったということです。裸貸しというのは、要するに、引っ越しのときに建具や道具を持って行くことができるだけでなく、町のあちこちにある建具屋さん、道具屋さんから、家の内部のしつらいといいますか、建具道具類を買ってきて、それを備え付ける、こういうシステムだったということがわかるわけです。こういう商売がこれほど広く成り立っていたのは多分大坂だけだったという風に思います。それほど大坂には借家がたくさんあったということですね。



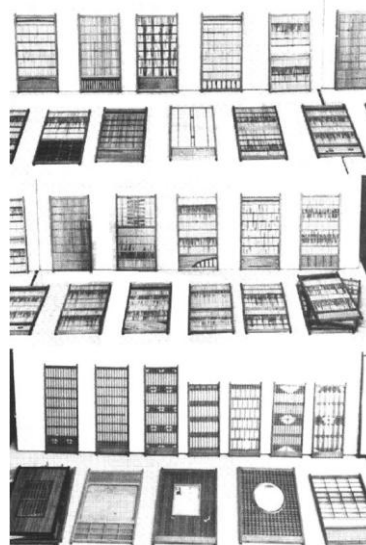
図9

面白いのは、新古という表現ですね。まず、新しいものを売っている。新しい建具や道具を売っていると、はどういうことかという、先ほど申しましたような、見込み生産ができたわけです。家を実際に建ててみなくても、そこに納める建具類の寸法が決まっているから販売できる。いわゆるプレファブリケーションですね。プレハブ住宅産業というのは戦後関西で始まったと言われますけれども、そのベースともいえる産業が江戸時代には成立していたということなのです。



図10

一方、古の方、古い方は何かというと、既存の住宅の中の中古の建具や道具を流通させる産業が成立していたことを意味します。新品を売る店が同時に中古品の売買をやっていたわけです。リサイクルショップを兼ねたプレハブの建具道具の販売店がまちのあちこちにあった。こういう産業のバックアップがあって、裸貸しというのは成り立っていたということがいえます。



建具

大阪市立博物館蔵

図11

これは(図11)、大阪市立博物館にある、建具の模型、ミニチュアなのですね。非常に精巧に出来ていて、当時の建具のデザインがよくわかる。でも、どうしてこんなものが作られたのかおわかりでしょうか。これは、要す

るに建具の立体カタログなのです。見込み生産できるといっても、すべての商品を作っておくわけにはいかない。そこで、カタログというものが作られたんですね。雛形を描いた紙ベースのカタログというものもちろんあったわけではありますが、それだけではなくて、こういうミニチュアの建具も作って注文をとった。大坂のインフィル産業のすごさを実感します。



図12 竈と流し



図13



図14

さて、大坂の借家は裸貸しという仕組みに支えられていたのですが、1、2割は持家がありました。大坂のまち、持家と借家が混ざった形で運営されていたことになります。そして、まちの運営、マネジメントの主体は持家の所有者ということになっていたわけです。借家の住まい手は高い流動性がありました。一定期間借家に住んで、どんどん住替えていく。竈（かまど）や流しは、持ち家の場合(図12)は造り付けだったわけですが、借家の場合は、先ほど申しましたとおり店子が調達しました。つまり、設備も可動式だったのです。裸貸しの裏長屋の裸の状態とはこういう状態で(図13)、畳もなければ何の設備もない。居住している状態は、このように可動式の流しとか竈があります(図14)。こういうものを



図15



図16

持ち込んで生活をしていたという事です。竈のことをヘッツイさんと言いますね。ヘッツイ盗人という上方落語があるんですね。竈の泥棒の話なんです、竈が造り付けの江戸だと成り立たない話なんです。こういう風に建物にくっついていない持ち運び可能な竈というものがあるので、盗むという事が可能だったという事になります。

さて、大坂の町は基本的には通りに面したところは何らかのお商売をされていました。通りは季節によっていろいろと



図17

表情を変えながら賑やかに演出されていました(図15)。ただ、首都圏から来られた方は、大阪といえば非常に派手な文化があるところだと思っておられる方が多いのではないかと思います、実は必ずしもそうではないのです。とりわけこの住まいのミュージアムで展示している船場文化は、実は、中に入



図18

ったらわかりますように、派手か地味かということであると、どちらかという地味な空間を志向しているのです。要するに、商売人の倫理観・価値観というものを反映していて、大坂画壇の描いた掛軸とか襖絵とか、そういったものを見比べますと、京都では雅やかなものが好まれていたのに対して、大阪では非常に抑制が効いたものが好まれていたことがわかります(図17, 18)。江戸と関西はいろいろ違いが指摘されますが、同じ関西でも大坂と京都では違っていただけです。

ところで、こういう大きな町家に行きますと、お座敷があつて、お座敷と庭がつながっているという構成が一般的です(図19, 20)。私は内部空間と庭のどちらにも興味を持って

てきましたが、とりわけ最近、インテリアとエクステリアの間の空間や両者の関係性、そこで展開されてきた生活文化に強い関心を持っております。例えば町家では、通り庭のほか、座敷の庭、中庭な



図19



図20

どがとられているのですけれども(図21, 22, 23)、庭そのものと部屋の中をつなぐ部分というのがどのようにデザインされているかという事が大事だと思うのです。内部と外部の関係、つないでいる空間の扱い方については、われわれはこういう伝統的な建物からもっと学ぶ必要があると思います。居住文化の継承や発展を考えると特にそのことが大事です。また、環境問題を考えるときに、環境調整上こういう空間の役割は大変大きいのではないかと考えております。内部と外部の関係が稀薄な冬を旨としたエコ住宅の作り方を短絡的にまねることがないようにしなければなりません。居住文化を継承、発展させながら環境問題についても対応できる住宅は、伝統的な住宅をよく読み込むことを通じて生まれるはず



図21



図22



図23

2. 現代版裸貸としてのスケルトン・インフィル住宅

さて、私はかつて、京都大学の建築学科で、私の恩師である巽和夫先生という方の研究室に属していたのですが、丁度私が大学院生の頃に二段階供給方式、あるいはスケルトン・インフィル方式という、新しいハウジングシステムを開発するような機会がございました。当時、私は、その研究を担当して、その後ずっとそれに関して仕事をしてきました。1973

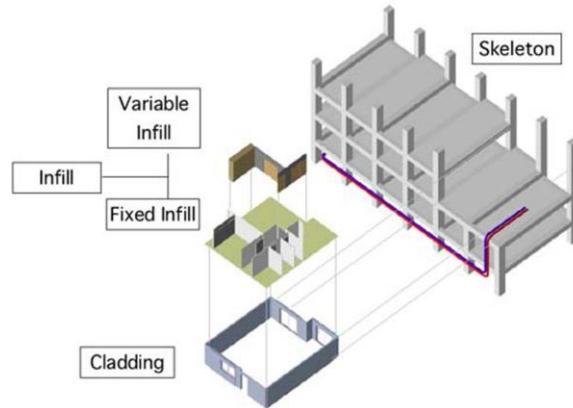


図24

年、第一次石油ショックが起りましたが、同じ年に行われた住宅統計調査によって、日本の全ての都道府県で、住宅数が世帯数を上回っているということが確認されました。そういう時期だったんですね。その時、住宅は量の時代から質の時代へ変わったと言われたのです。しかし、住宅の質とは何かというと実はよくわからない。この問題は住宅研究者にとっては研究の目的にかかわる非常に重要な問題として議論されました。質とは何かという議論の中で、例えば、建物の持っているキャパシティ、まあ、広さというと面積そのもののようですが、広さの持っている、何をどこまで受け入れるのかという能力であるとか、様々なライフスタイルに対応できる多様性とか、あるいは、まちなみや環境であるとか、これまでの住宅研究の中では必ずしも十分議論されてこなかった価値観が議論されたと思います。また、こういう新たな価値を受け止めるハウジングシステムを、スケルトンという社会的な部分とインフィルという私的な部分とを組み合わせる方法の研究開発を行いました。さらに、これを現実の住宅計画の中で実現する方法を研究してきたのですが、これはまさに、先ほどからお話ししてきた大坂の裸貸の仕組みの現代的再編そのものだったのです。

ところで、現在のスケルトン・インフィル方式では、躯体としてのスケルトンと、内装や建具などのインフィルに、集合住宅の外壁とか戸境壁を意味するクラディング（Cladding）（図24）を加えた3つの物財の関係としてシステムが組み立てられています。また、これらの組み合わせによってできた集合住宅に対してどのような技術的な対応や権利関係を考えていくのかというような議論が行われています。スケルトンは長寿命であるべきから、当初から100年以上の寿命を想定しようと考えていました。これに対して、例えば、クラディングは30年、インフィルは15年といった寿命を想定し、これらを入れ替えていく事によって住まいそのものが個人の変化や社会の変化に対応できるようにしていると考えたわけですね。

スケルトン・インフィル方式の物財論的な本質は、“もの”の寿命と利用する方のニーズの変化を対応させようということです。ニーズの変化が激しいところは“もの”としても

短い寿命で、安定的なニーズがあるところは長い寿命でと考える。それらを組み合わせて、物理的寿命が尽きる前に社会的寿命が尽きることによって起こるスクラップ・アンド・ビルドを回避しようという考え方です。基本的にはこの考え方は間違っていないと思います。ただ、インフィルはいつも15年でいいのか、クラディングはいつも30年でいいのか、というようなことをその後考え始めたということがございます。今はここで止めておいて後ほど、またこれについてお話をしたいと思います。

< 泉北桃山台プロジェクト（大阪府堺市） >

さて、今のようなスケルトン・インフィルの技術開発を行った後、最初にこの方式を適用したのが、泉北ニュータウンの桃山台というところ



図25 大阪府住宅供給公社 桃山台住宅



図26

ろでした(図25)。大阪の南のほうにあります。

行政区でいうと、堺市に位置します。大阪府住宅供給公社の住宅としてスケルトン・インフィル住宅の日本第一号が実現したわけです。個々の入居者のニーズに適応した住戸を作っていこうということで、インテリアの部分はそれぞれ個別の建築家の方に設計をお願いしました。スケルトン設計者とインフィル設計者とは別の人格と考え、インフィルは、居住者とインフィル設計者が相談をしながら設計を行いました。

これは、当時新婚のご夫婦の家で、100平米くらいあるのですが、ベッドルーム以外は全部ワンルームです。

この家(図26)は、実は私にとっては非常に思い出深い家です。先ほどの新婚世帯とは異なり、こちらは年配のご夫婦と二十歳を過ぎたくらいの息子さん、娘さんの4人家族です。ライフステージの高い世帯で、今まで住んでいた家からの住み替えです。ただ、今までの家には愛着もあり、必ずしも全部不満があったわけではないと言われるわけです。ここへ住み替えて来ようと思うのだけれども、今まで住んでいた家にも思い出があって、この家のここは良いと思うところがある。一方、不満もたくさんあり、ここはこういう風に変えたいと思うところもある。新築のマンションを買ってもこうしたニーズは何も反映されない。今までの家のよい居住環境をそのまま継承し、まずい所を変えたい、こういうニーズを持っておられる住まい手の方でした。

当時、私はまだまだ年齢が若く、生活経験もあまりなかったわけです。そこで、インフィルについては、多様な住まい方を、京都大学で蓄積されてきた大量の住宅調査をベースにして類型化し、それぞれに応じた家の作り方を考えました。その結果、傲慢にも、相当精緻で論理的なプランバリエーションが計画できたと思っていました。しかし、このよう

なニーズがあるということを想定する事は当時の私には全くできませんでした。それは本当におっしゃるとおりで、私にとっては目からうろこが落ちる思いでこの方のお話を聞いていました。最終的に、今まで住んでおられた家の一室とこの部屋はほとんど同じようになりました。元々使っておられた箆笥を置き、この箆笥の寸法に合わせて柱を立て、仏壇や床の間を配置し、という風にして、その人にとって居心地の良い環境を継承しました。一方、隣のダイニングキッチンなんかはもう全く変えたい、というような希望があって、新たなニーズに応えたわけです。住まい手の参加、あるいは多様なニーズへの対応は、単純にバリエーションの問題ではない。人のニーズがこういうパターンになります、設計はこういうパターンになります、どの掛けあわせが良いでしょうかと、そういう話ではないのです。人の一生の中で、その人がこれまで獲得してきた居住環境を継承、発展させていくということは非常に重要なわけです。特に、住み替えの時に起こる環境移行に対して、どういう環境は出来るだけ変えないで、どういう環境は変えていくのかということをしつかりと考えなければ、家の設計など出来ないんだという事を当時認識した次第でございます。

その後、この住宅を含めて、この団地の入居後調査を何度かやりました。2000年に約20年後の住まいの変化を調べる機会があって、全ての住宅を訪問して変化を見ました。スケルトン・インフィルの考え方といいますか、この躯体の条件を上手く活かして、どの家も何らかの変更をされていました。しかし、とんでもない大きな変更はされていないということもわかりました。これは、想定の内範囲です。ただ、実際に、誰にどういう工事を依頼して、どういう環境が実現出来たかという話になると、これはもう問題だらけで、こういう集合住宅のリフォーム工事の仕組みには問題が多いということがよくわかりました。要するに、リフォーム市場の中で住まい手を支援する仕組みが十分できていなかったということが明らかとなったわけです。

<千里亥の子谷プロジェクト（エステ南千里）（大阪府吹田市）>

これは、桃山台の経験をふまえて、吹田市で行った「エステ南千里」というプロジェクトです。先程の泉北のプロジェクトでは、水回りの位置に大きな制約があったんですね。地元自治体等の指導等がございまして、設備の自由な配置ができなかったのですが、ここでは、水回りが自由に配置できるようになりました。そして、社会的な部分と私的な部分を設備についてもはっきりと整理して、明確な配管システムを確立しました。専用配管はすべて住戸の中に納まり、共用配管は専有部分を通過することなく共用部分からメンテナンスできる仕組みとなっています。そして、インフィル設計は桃山台と同じように住まい手参加で行われました。この二つの写真は別の住戸ですが、水回りを含めた多様性を実現することができました。こちらは新婚世帯の家です。こちらは三世代同居の家で、キッチンやトイレが二箇所にあります。こういうニーズにも対応できるということが、ここでは検証されました。

＜実験集合住宅 NEXT21（大阪府大阪市）＞

こういう経験をふまえて、1993年に、大阪ガス実験集合住宅「NEXT21」というスケルトン・インフィル方式を全面的に取り入れた住宅が完成しました(図27)。これも、もう見ていただいた方があるとは思いますが、現在もまだ居住実験を継続しています。5年を単位にした居住実験を1フェーズというようにしていますが、今丁度、第3フェーズの途中でございます。



図27 実験集合住宅 NEXT21

これは第1フェーズの時のものですが、ライフスタイル提案型住戸、つまり、新しいライフスタイルに対応した家の提案を行って、この家に住んでみたいという人を募集するというやり方の住戸と、住まい手参加設計住戸、つまり、先に住まい手を募集して、住まい手参加によって家を作っていくというやりかたの住戸の二つのタイプを作りました。

これは、ライフスタイル提案型住戸のほうで、“自立家族の家”という家の内部です。設計者はシーラカンズ、当時はまだ若い設計者集団でした。これは、住まい手参加設計住戸ということで、吉村篤一さんがインフィルの設計者です。住まい手参加設計住戸ですが、中に入ると戸建住宅のような家です。先ほどお話しした内部空間と外部空間、インテリアとエクステリアの関係性という点からも、非常に良く考えられた空間になっています。

＜フレックスコート吉田（大阪府東大阪市）＞

NEXT21で実現した技術を何とか一般の賃貸住宅、つまり庶民の住宅として展開できないかという思いがありました。そんなとき、いわばローコストNEXT21のような企画が大阪府住宅供給公社の中で出てまいりました。フレックスコート吉田という、東大阪で建てられた住宅です(図28)。ここでは、基本的にはNEXT21と同じように、スケルトン、クラデ



図28 フレックスコート吉田

ィング、インフィルという関係を保ちながら、色んなところでコストダウンを図っていく事が考えられています。さらに、この住宅は阪神淡路大震災の直後にできているのですが、震災の教訓をできるだけ取り入れて計画したプロジェクトでもあります。今日は特にインフィルの話をしたいと思います。賃貸住宅ですが、インフィルを江戸時代の裸貸のように、居住者が所有して、循環させていくというような仕組みをつくろうとしました。実際には全体を居住者の所有物ということが難しく、建具の一部を居住者の所有として、引越しのときは売って出ていくというような仕組みをつくって、このプロジェクトを実現したの

です。また、インフィル部分の設計や変更、それをサポートする仕組みをもう一方で開発しました。この時、インフィル事業のコンペをやりまして、民間事業者 3 社が最終的に選ばれました。3つの会社がそれぞれ固有の技術を使いながら、同じ基本設計と要求性能に対応するインフィルを制作しました。そしてそのインフィルを実際に住まい手の方が選んで組み立てる時に、どのように間取りを作ったらいいか、最終的にいくらお金がかかるのかなどが簡単にわかるような支援ツールの開発をしました。そして、そのツールを使いながら初期の設計をするとともに、賃貸住宅入居後、例えば子どもが成長して、もう一部屋増やしたいという時に、どうしたらいいかというような事を簡単に検討できるような仕組みを作りました。この時に、可変間仕切りパネルや、可動収納家具などが開発されて、その後のプロジェクトで、より改良を加えられて使われています。

3. NEXT21 リフォーム実験

NEXT21 から技術移転を行った NEXT21 以外のプロジェクトで開発された技術を、また NEXT21 に戻すという再技術移転も行われてきました。いったりきたりしながら、NEXT21 では、これまでいくつかのリフォームを重ねてきています。この中で一貫して考えてきたことは、環境的持続可能性と、社会的持続可能性がインフィル設計を通じてどのように実現するかという課題でした。

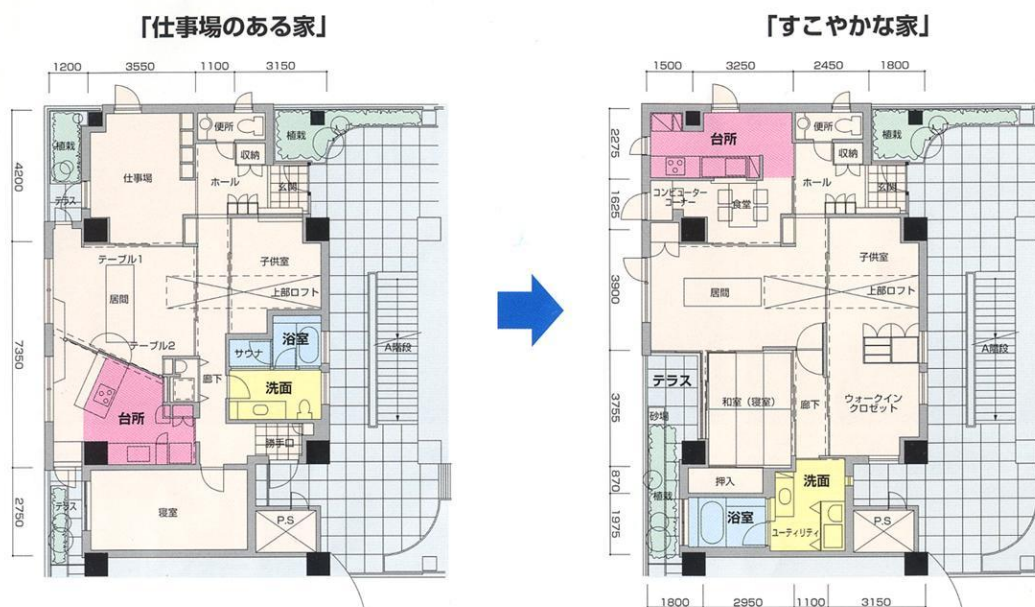


図 2 9

最初にやったリフォーム実験は1996年で、図のように(図29)、水回りを含む大規模リフォームを外壁の一部を変えるようなやり方で行いました。こういう風に、外壁の位置が変わるのですが(図30)、できるだけ外壁を切ったり貼ったりしながら、元の外壁を使おうという

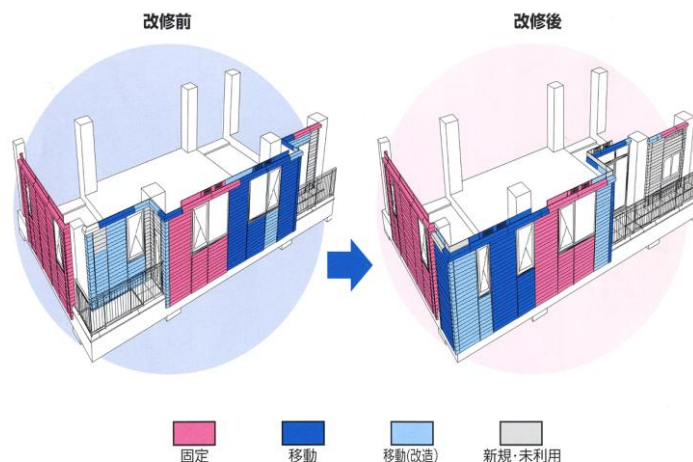


図30

ような計画でした。これは内部についても同じで、間取りが変わりますが、元々あった家具とか、床とか様々な建具類を含めて、家の中にあつた部材をできるだけ切ったり貼ったりしながら使っていくとしました。しかし、新しいものもありますから当然あちこち継ぎはぎの過程がでてくるんですね。継ぎはぎ自体が味があるといいですか、面白い家の作り方が、これからもっと考えられていいんじゃないかと思えます。



図31

2000年、2003年には、4階の405住戸でリフォーム実験を行いました(図31)。ここでは、増改築の時に出来るだけゴミを出さないという環境的持続可能性に加え、共働きの世帯のニーズとその変化に対応するという社会的持続可能性をテーマとしました。共働きのご夫婦10名に参加していただき、そのニーズをふまえたシナリオを描いてリフォーム実験を行い、さらに入居された共働き夫婦の参加の下で更なるリフォーム実験を行いました。

このリフォームで、どこまでゴミを出さないでリフォームができるかも確認しました。再利用が85%、収納というのは例えば床の下に空間があって、この下にいらなくなった建

具類をしまう事ができるのですが、こういう風にして捨てないで、収納していくという事を含めると、95%くらいが無駄にならないで使い続けられる、5%くらいがどうしてもゴミとして外に出さないといけない、こういうことが実験からわかってまいりました。

NEXT21は、3階以上は人が常時住む空間で、2階は実は非居住とか短期居住用の住宅が入っているのですが、その2階の201という住戸で、インフィルの実験を2年くらいやっております。先ほど申しました社会的持続可能性、つまり少子高齢社会への対応と、環境的持続可能性という2つのテーマに沿って、様々な建具や家具の実験をやりました。少子高齢社会への対応ということに関連して、様々な外部のサービスを受け入れながら、プライバシーを保って生活することを想定したインフィルのあり方が検討されました。また、必ずしもこれまでの家族用の住宅での共同利用の単位ではなくて、個人が生活の一部を共同化して生活するような住宅でのインフィルのあり方等が、社会的持続可能性という課題の中で議論されました。一方、環境的持続可能性の議論としては、設備を組み込んだインフィルの開発を行いました。この時は、出来る限り固定壁をつくらないように、可動式の家具を組み立て、様々なニーズに対応していこうというような事を考えてやっていたわけです。同じ部材とか家具を使って、異なる居住シナリオ、たとえば、高齢者の共同居住とか、シングルファーザーの子育てファミリーとか、様々なシナリオに対応できることを考えて、実験を繰り返してきました。この実験で、固定インフィルと可変インフィルをうまく組み合わせることによって、固定インフィルをガイドにしながらか可変インフィルを動かしていくと合理的であること、うまくやれば、いずれはゴミになるような間仕切りを排除することができるということなどが徐々にわかってきました。それから、また、こうした考え方を、新築だけでなく既存建築の改修に適用することも一つのテーマとして考えています。既存建築であることを想定して、いろいろな制約条件を与えてインフィル実験を行いました。たとえば、天井が低く床も上がっているところで同じような実験をして、どういう問題があるかということを検討しました。これは、この時に使ったインフィルです。インフィルは、今まで動かせる事に価値があると考えていましたが、先ほど申しましたような理由で、場合によっては、固定しているということにそれなりの意味があるということもあるわけです。可変インフィルの設置・変更役に立つ固定インフィルを丁寧に計画することが、どこにでも動かせるインフィルの計画より重要な事があるということです。

一方、可変インフィルについては、可動式間仕切家具だけではなくて、設備一体型インフィルの開発を行いました。例えばラジエーターが付いているインフィルを考える。こういうことをやると、熱の影響で扉が反ってくる等、色々な問題が起こってまいりますが、さまざまな実験を繰り返していくつかのインフィルを実現しています。これは、流し台が含まれた可変インフィルです。間仕切り変更のときに配管をどのように動かせばいいのかということを検討して実験しています。

現在、3階にある人が住む住戸のリフォームの検討を行っています。そこでは、2階で行った実験の成果を発展させるとともに、環境的な持続可能性の観点から、先ほど申し上げ

たインテリアとエクステリアの“間”の空間、これを環境調整空間と呼んでいますが、その空間のデザインの検討を行っています。外壁をダブルスキンにして、ちょうどオーバーを着るのではなく重ね着をするような考え方で、全体としては CO2 排出を抑制しながら、様々な居住者のニーズに対応していけるように計画しています。ここでも、201 住戸と同じように、様々なシナリオを作っています。共働き子育てシナリオとか、成人父子シナリオとか、高齢母子シナリオとか、多様なシナリオに対応したインフィルデザインを時間をかけてやっています。

4. 愛着型インフィルについて

こういう風に裸貸の延長として、現代の住まいに関する実験をいろいろとやってきたのですが、以前から気になっていることがらで、改めて考え直していることがらがあります。一つは、先ほど申しました、ウチとソトとの関係といいますが、インテリアとエクステリアの関係の再編です。もう一つは、愛着型インフィルの必要性です。これについて、少しだけ、話をさせて頂けたらと思います。“住み心地”を良くすることは住宅供給において重要ですが、“住み心地”の意味についてはもう少し深く考えないといけないと考えています。住まいが住まい手にどれだけ色々なサービスを提供するかというのが“住み心地”です。住まいの性能をよくしていくと住まい手の満足度が一般にはあがっていくのですが、要求水準も上がっていくので住まい手の満足度が上がらなくなることもある。これを満足の限界といいます。一方、住まいの性能は必ずしも高くならなくても、住まいが住まい手に働きかけるだけではなく、住まい手が住まいに働きかける、こういう相互の関係の中で得られる満足もある。この価値を、“住み心地”ではなく“住みごたえ”と呼んできました。相互の働きかけで住まいが住まい手の一部になる。そこにアタッチメント、愛着が生まれる。このしくみがうまく働くと、より持続性の高い、住み継がれていく家が生まれていくのではないのでしょうか。

では、どうすれば“住みごたえ”を高め、愛着を生む家を作っていくことができるのでしょうか。さまざまな調査や実験を繰り返している間に、普段われわれが接している家の中のインフィルにあたる部分、ここの作り方というのが、決定的に重要ではないか、という風に考えるようになりました。スケルトン・インフィルの正論からすると、たとえば、スケルトン 100 年、クラディング 30 年、インフィル 15 年という序列になるのですが、スケルトンより長持ちするインフィル、例えば 300 年インフィルなんていうことを考えることに意味があるのではないか。消耗品だけに囲まれて生活するのではなく、使い継いでいくものも豊かな住生活には必要である。相当真剣に今、私はそのことを考えています。引っ越しの時に持ち出して別の家で使えるということも含めて、長く使い続けるインフィルも考えていかなければならない、これが愛着型インフィルという構想なのです。当然のことながら、住まい手の参加というのは非常に重要な事で、基本ではありますが、これだけをただ抽象的に言っても、なかなかこういう愛着型のインフィルはできません。具体

的には例えば古い家具とか、建具とか、古材を活用してインフィルを作る仕組みを考える、あるいはその地域の職人さんとコラボレーションする中で、インフィルを作っていくということです。古い家具とか古い建具、古材を活用する例が、最近いくつか住宅の中で見られるようになりました。しかも、これに反応しているのはわれわれの様な年齢層ではなくて、もっともっと若い、30代半ばの団塊ジュニアといわれるような人たちであることが、いくつかの調査の中でわかってきています。われわれの世代にはちょっとついていけないようなところもあるのですが、彼らは、こういうものを「かわいい」という風に表現するんですね。古い家具や建具、古材のがなぜかわいいのか、もう少し研究しなければなりません、とにかくそういうことが起こってきています。あるいは、地域の職人さんとのコラボレーションなども可能性を感じています。大阪の北区役所の取り組みで、これは必ずしも住まいとは関係のないものですが、地域のまちづくりとして職人さんの存在を確認して、まちとしてのアイデンティティを共有しようという活動が展開されています。くらしの今昔館で伝統文化の職人展等も行われています。様々な職種の職人さんの仕事、別に建材じゃなくていいわけです、様々な仕事、地域に根ざした仕事をうまく住まいと結びつけて、愛着型のインフィルを考えていくということが、私はこれからの住まいにとって非常に重要なことではないかと考えています。また、これは職人さんと住宅建設という関係の中で考えていくというよりも、地域のまちづくりの中で考えていくべきです。地域の職人さんの存在をきちんと認識をして、その人たちの仕事を日常の生活の中に取り込んでいくという活動が大事です。そういう方法でなければ本当の愛着型インフィルは実現しないのではないかと思います。非常に雑駁な話で恐縮ですが、私の話は以上とさせて頂きたいと思います。ご清聴ありがとうございました。 ■

図版提供：大阪市立住まいのミュージアム「大阪暮らしの今昔館」／大阪市立住まい情報センター／大阪府住宅供給公社／大阪ガス㈱